
魔鬼 改

疾風 式式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔鬼 改

【Nコード】

N8819Z

【作者名】

疾風 式式

【あらすじ】

ざつと内容説明（もしかすると変更あり）

ある者はインターネットのサイトで、ある者は城内or訓練場の噂、ある者は本の とある一頁、ある者は宝の地図（？）

ある者は失踪者を最後に見た人物から

不思議な館の話を聞き

館に不法侵入した。組のパーティ達

最初は軽い遊び心で 館内部を探検していたが

不気味な化け物（怪物）等と遭遇し
戦い、逃亡し、隠れる
外部との通信や連絡…無線の取れないまま
一人また一人と力尽きていく中
何とか他のパーティと協力して
脱出を目指していくが……………

魔鬼（登場人物）

- 1、初期グループメンバー
- 2、大まかな種族（♂ / ♀）
- 3、職業
- 4、館に來た理由

虎影・白狼・天狼・猛虎

人間… ♀ ♀ ♀ ♀

普通の高校生不良グループ

- ・クラス内での噂話を聞いて
- ・先に消えた優等生グループを探す為

フィル・ルナ・レン・ユウ

獣人（魔物）… ♀ ♀ ♀ ♀

砦を守る一般兵

- ・本家の人から聞いた噂話
- ・好奇心

ライラ・ケルベロス・セリシア・カリーナ

馬鹿4人組の教官、上官

魔物… ♀ ♀ ♀ ♀

- ・馬鹿四人組の話

零式・クロガネ・暴虎・牙狼

雨宿りの旅人

人間… ♂ ♂ ♂ ♂

・雨宿り

俊一・霧衛・琴乃・翡翠

兄妹

人間… ♂ ♀ ♀ ♀

・近所の暇潰し探検

大和・飛翔・夜桜・賢狼

軍隊

人間… ♂ ♀ ♀ ♀

・逃亡したテロリストの追跡

クラッド・アーリヤ・ロジーナ・ミハエル

テロリスト

人間… ♂ ♀ ♀ ♂

・軍隊からの逃亡

白零・黒零・シロガネ・斬鬼

犯罪者達

強化（改造）人間… ♀ ♂ ♂ ♂

・行動本部拠点にしようと侵入

竹虎・軌狼・琥珀・狼夜

普通の高校生優等生グループ

人間… ♀ ♀ ♀ ♀

・怪物の撮影確認

フォレス・ルージェ・リィア・ヴァン

警察官

人間&魔物… ♂ ♀ ♂ ♂

・行方不明者の搜索

リヨウ、ルイ、ライト、カリン

警察官

人間&魔物… ♂ ♀ ♂ ♀

・行方不明警官の搜索

古式、クロノ、カルロス、ジョン

傭兵

人間&魔物… ♂ ♂ ♂ ♂

・ギルドの失踪者搜索の掲示板を見て

友哉、雅人、哲平、良介、紅葉、美月、誠、千早

私立柏紅葉南高校グループ

人間… ♂ ♂ ♂ ♂ ♀ ♀ ♂ ♀

・肝試し

魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）（前半）

虎影「おーい、白狼琥珀^{ハクロウ} 見なかったかー？」

俺の名は刻命虎影^{トラカゲ}

武蔵谷川高等学校の2年だ

性別は女、最近の趣味はパンチングマシンで
最高記録を叩き出す事だ。

白狼「うんにゃ？ 見てねえが？ 男にNTRれたんじゃないの？」
虎影「お、おい……え、縁起でもねえこと言うなよ……ふ、ふふ不安になるだろ？！」

白狼「『最近、虎影が私と夜【自己規制】してくれない……男、作っちゃえ！』」

虎影「や、やややめろよ！！」

此奴は白狼

俺と同じ武蔵谷川高等学校2年だ

一年の頃は色々な意味で好敵手的な存在だったが
2年になってからは、親友とも呼べるような仲間となった

性別は俺と同じ女で趣味は確か…タップダンス？ 上級生に喧嘩を
売ること…？

あれ…？ レズビアンの道に入って見るだっけか？

天狼「つーか、出席表見ろよ…一発で分かるぞ」

猛虎「テメエ……姐御に何て口の聞き方しやがる…？」

白狼の隣でヤレヤレと首を振っているのが天狼^{テンロウ}

天狼の隣で半ギレ状態、殺気が滲み出ているのが猛虎^{モウコ}である。

天狼「あ？　なんだ？　文句あるのか？　殺つたるぞ、ゴラ？」
猛虎「上等だ　オラッ！！」

虎影「猛虎その辺にしておけ。サンキュ天狼。」

毎度思うが…この二人は、もう少し仲良くした方が良さと思う
きっと仲良くなれば俺等のようになれると思うのだが……

白狼「ふふふっ……」

虎影「どうした？　白狼？」

急に白狼が笑い出した。

白狼「いや…な？　何か昔の自分等を思い出してな？」

虎影「あー……納得。」

白狼「で？　琥珀は？」

虎影「……15日前程から居ないな……」

白狼「優等生が15日もか？　内申点に響くだろ…見せてみる。」

俺の言うことが信じられないと言うように

白狼は出席表を覗き込んで来た。

俺は、この時あることに気がついた…

奴等も居ない…猛虎と天狼を抑える二人も居ないことに……

虎影「猛虎、天狼！　竹虎と軌狼は？」

二人「……？」

二人ともお互いに顔を見合わせ

『そう言えば……居ない』と言う顔をしている……

猛虎「……………そう言えば…いつもなら姐御に止められる前に 俺の事を制止するはず…」

天狼「言われてみれば…いつもなら『この馬鹿が、いつもすまない』とか言ってる…」

互いに謝るのに……………」

案の定だ……………完璧に竹虎タケトラと軌狼（キロウ）の事

完璧に忘れて居やがった……………お前等なあ……………」

今になって、琥珀コハクと狼夜（ロウヤ）の苦勞が分かったような気がする……………」

帰ってきたら勞ってやらないとな。

因みに、竹虎は猛虎の抑え役で 大勢で喧嘩する時は戦力になる表情は硬いが良い奴だ。

軌狼は……………知らん。天狼の抑え役のようだが……………」

白狼「こりや相当おかしいな……………」

虎影「どうした？」

白狼「琥珀の他にも、竹虎や狼夜や軌狼も同じ日を堺に休んでいるぞ……………」

3人『なん……………だと……………』

白狼を除く全員がその場で固まった

白狼「天狼と猛虎はともかく……………出席表見た虎影が何故、知らない？」

虎影「……………なんででしょう？」

白狼「まあ、良い……………取りあえず4人の情報収集でもするか

厄介事に巻き込まれてなければ良いが……………NTRれたり……………」

チラッ

虎影「チラ見しながら、言うな！！ 不安になるじゃねえか……………」

白狼「さてと、じゃあやるか……………NTRれる前に……………」 チラッ

白狼「最近、クレージュ南にある館に男6人と女4人の男女が入って行き出てこなかったと言う情報があった。」
3人『!!!』

この情報を聞いた瞬間
全員が固まった。

女4人の情報で固まったのも勿論だが
クレージュの南の館と言ったら、
前に琥珀が幽霊見たさに探検してみたいと
カメラ片手に駄々をこねた場所であった
因みに今 俺等が住んでいる場所がクレージュなので
近所と言っても他言ではない

虎影「じゃあ、琥珀はそこに…?」

白狼「恐らくな。映像も見るか?」

虎影「!」

俺は息を飲む…そこには琥珀達が映っていた
正直 顔の方はボヤけているので、絶対とは言えないが…
明らかに琥珀らしき人物の後ろには仕込み刀を持ち歩いている人物
が居る

さらに、琥珀らしき人物も館に入る瞬間に片手にビデオカメラを持
っている

うん……絶対にコレ琥珀だ。間違いない…

虎影「でも、どうやってサボる? このままじゃ進級出来ないぞ?」

白狼「No problem」

猛虎「…は?」

白狼「訳：問題ない」

先公「おい、お前等とつくに下校時刻を過ぎているぞ。」

天狼「先公！ 明日から、一ヶ月程公欠するぜ。」
先公「はあ？ そんな事許されると思「はい。」……なんだこれは？ つ！！」

白狼が何かポケットから取り出し
先公に見せつけた。
すると見る見る先公の顔が青くなつて行つた。

白狼「せんせー教員だよな…？ こんなトコ入っても良いのかなー？
校長にチクツろかなー？」

先公「ぐっ……。分かった。公欠な…。」
白狼「どうもー。」

猛虎「なあ、何を見せたんだ？ 後、賢狼ってどんな奴なんだ？」
天狼「さあ？ 知らないほうが良い。賢狼は賢狼だ。」
白狼「じゃあ、俺等はコツチだから。」
虎影「応！ また明日“クレージユ南館前”でな！！」

こうして俺等は先公を脅し
一ヶ月と言つ休みを貰い
明日に向けて確実に準備をした

猛虎「あ、姐御 おはようございます。」
虎影「おはよう 猛虎。白狼と天狼は？」
猛虎「中庭に居ます。入りましょう。」

門を潜つた瞬間の事だつた。
何か背筋が凍るような寒気が全身を襲つた

虎影「っ！！」ブルブル

猛虎「どうか したんですか？」

虎影「何でも無い……行こう。」

中庭では二人が入口前で

館を見上げていた

白狼「おっ！ 虎影らしい虎の様な猛々しい戦闘服だな」

虎影「白狼も、白狼らしい狼の様なスラッとした戦闘服だな！！」

天狼「はいはい。それじゃあ、入りますよ？」

猛虎「ヒヤッハー！！ 一番乗り！！」

虎影「あ、こら！ 待て！！」

こうして俺等は館内に潜入した。

~~~~~

フィル「最近、敵の攻撃が弱ってきてるな！。フォールド城陥落ももうじきかな」

私は午後の小訓練をサボりながら  
黒い煙を上げているフォールド城下町を見た

私の名はフィル  
ワールド攻略前線の兵士の一人で  
種族はワーウルフで女です

フィル「あーあー…暇だなあー…そうだ。この前に見た街に行こう  
！！」

私は立ち上がり  
くるつとまわり、完璧な変装をした。

変装と言っても…まあ、ただ単に頭の上に飛び出ている耳と  
腰の当たりに生えている尻尾を布で覆って隠しただけだけど…  
でも これだけをするだけで、町に居る人間達の反応は  
随分コロツと変わるものだ

本当に人間よりの魔物で良かったと思う  
本当は人間に産まれたかったけど…この体で生まれてっちゃったん  
だから

仕方のないことだけど…

そんなことを考えている間に、もう町の中に入っていた

フィル「あ、おじさん。ソフトクリーム一つ頂戴。」  
おじさん「あいよ。」

私は近くにあるソフトクリーム販売店に駆け寄ると  
バニラ味のソフトを一つ買った  
それにしても、人間製のソフトは凄く美味しい  
魔物製のソフトとは、比べ物にならない美味しさだ  
甘さも良し、コーンも美味し、形は綺麗な形  
魔物もみらなつて欲しいものだ。  
そんな時、ある噂が耳に入った。

少年2「ただの噂でしょう。本当に行く気ですか？」

少女1「お化けがいるんでしょう？なんか怖そう……」

少年3「本当だって！　すでに行方不明者が出ていて…大きな化け物に食われたって噂だ。」

少年1「行ってみようぜ！　場所は？」

少年2「確か、ここからもっと北に進んだ所に大きな館があると聞きました。」

北に大きな館か…フォールド城が陥落して一段落付いたら  
友達のリン、ユウ、ルナを連れて探検してみよう

そんなことを思いながら私はベンチに座り

先にコーンをバリバリと食べ始めた

やっぱりコーンと一緒に食べるのも良いが、

クリームの部分だけで食べるのも悪くないと思っている

邪道だとか言う人もいるけども、これが私流の食べ方だ  
うん、これが正しいんだ。

ソフトもコーンギリギリ・ソフトドロドロに差し掛かった時だった

ライラ「ゴオオオラアアア！！　フィルウウ！！！」

遂に奴が来た。

私の上官であり、私の部隊長でもあるライラだ

全身漆黒の鎧を被っているのですぐに分かる

それよりも…なんで私の居場所が分かったの？！

ライラ「訓練サボって、お前は何してるんだああ！！！」

フィル「な、何って……ソフトを……」

ライラ「没収！！　邪道な食べ方をして！！　ソフトは没収だ！！！」

フィル「あゝ……………！！　クリームの部分楽しみにしてたのにー  
！！！」

モグモグとクリームはライラ隊長の中に消えていった

ライラ「ふむ…クリームだけでも美味しいな…」

フィル「ああー…10ギルがあ…」

ライラ「さて、と…少し腹も膨れたし、帰るぞ。逃げても無駄だ。」

フィル「痛っ！！いつの間にロープで縛ったの！？」

ライラ「いっただろうなあ？悪い犬は少し躰が必要なようだな…」

えっ？ ちよつと、何その皮の鞭…

私そんな趣味無いんだけど！？

ライラ「ふっふっふっ…さて、帰ろうか？ 仔犬ちゃん？

？」

フィル「嫌 あー…」

その後、私が鞭で叩かれ

ヒヒイ言いながら、足腰が立たなくなるまで  
訓練と躰を体に染み込ませられた。

フィル「う あー…」

私が学生寮に帰れたのは

夜の20:00を過ぎていた

奥からエプロン姿のアヌビスのユウが食事を運んできた  
女のアヌビスって…何処か萌えるよね？

ユウ「随分と扱かれたみたいだな。大丈夫か？」

今日の晩御飯は　またチャーハンのようだ  
 キライな　ネギと玉葱が山というほど乗せられていた  
 これ絶対に、訓練をサボった事に対する嫌がらせだろう……  
 私はそう確信した。

フィル「ねえ……このチャーハン赤いんだけど……？」

ユウ「ケチャップ混ぜたからな。」

「フィル」にしては……涙の出る匂いが……」

ユウ「玉葱が入っているからな。」

嘘だコレ。

絶対にケチャップの代わりにタバスコが叩き込んである。

唐辛子も刺さってるし……

ユウ「要らないなら、片付けるが？」

「フィル、要ります！ 食べます！！……いただきます。」

[illegible]

私の絶叫が本部全体に響き

その後、笑いものにされた事は言うまでもない

レン「やったよ！ フォールド城、陥落！！ 私達の勝利だよ！！」

頭上でセイレーンのレンがメガホン片手に

勝利宣言を通告していた

ハッキリ言うと、五月蠅い。分かったから、早く降りてこい

この能天気アホウドリ。極太のネギ　その口に突っ込んでやるから早く降りてきやがれ。

ライラ「ふう……予定通り防衛戦はなかったな。

無駄な戦死者は無かったからよしとするか。」

全然、『よし』じゃないよ！

予想出来たなら、あんな訓練 要らないじゃないか！！

ライラ「……？ フィル、何処か不満そうだな？ 暴れ足りなかったか？」

フィル「い、いえ……べ、別に……」

ライラ「そうか？ 折角、私がお前と戦闘相手になってやろうというのに……」

うわぁ……命が幾つあっても足りやしない……

いつもの行動班で、セリシア戦闘教官に立ち向かうのよりも辛いよ……絶対に

フィル「でさ、3人とも明日から……暇？」

ユウ「ん？ ああ、暇だが？」

レン「コンサートも無いし、暇だよー！！」

ルナ「……………暇です。」

フィル「ならさ、怪物が出ることで有名っぽい館に行かない？」

無事、戦争も終わり4時間後

私は3人に昨日聞いた館の事を話した

レン「何それ！！面白そうだね！！！ 行く行くうー！！」

ユウ「そうだな……寮内でゴロゴロしているもの嫌だからな……………行く。う。」

レン「ルナちゃんは?!?!」

ルナ「……皆が……行くなら……」

ユウ「で? その館は何処にあるんだ……?」

ユウが伊達メガネを外し、本をパタンと閉じた

フィル「へ?」

ユウ「場所が分らないと、行くところも行けないだろう?」

レン「何ー? 忘れちゃったのー???」

何処……? 北だっけ? 南だっけ?

「……………」。

」

ええい……ままよ!!

フィル「た、確か! 南の館だよ!! ソウ、ミナミノ ヤカタ

ダヨ!!」

レン「フィルちゃんカタコトになってるー!! 面白い!!」

ユウ「レン、五月蠅い 静かにしろ。じゃあ、準備して明日行ってみよう。」

ルナ「……………」。

どうか、南の館で合ってますように……

レン「うわぁ ♪ 本当に こんな場所あったんだね ♪」

レンが大きな声で楽しそうに  
館を見上げていた。

明るい事は 良いことだが……

やはり少し五月蠅い……

ユウ「てっきり、単なるフィルの聞き間違えと思ったが……本当にあるとは……」

……ユウ……それって  
私の事、疑っていたの？

レン「この古い感じが、如何にも『怪物居ます危険！』見たいな感じだね〜」

本当に五月蠅い  
少し、殴って黙らせようか……？

ルナ「………フィル……？」  
フィル「……？ どうしたの？」

チヨイチヨイと服の袖をルナが  
私の影に隠れながら引つ張ってきた  
何処か震えているようにも見える……

ルナ「……やっぱ……探検止めない？ ……何か変だよ此処……」

確かルナって臆病な性格な上に  
実霊が見えたりする体質だった様な……

レン「え〜？ 折角来んだし、見るだけで帰るなんて止めようよ〜」  
ユウ「此処に来るのに5時間も掛かったしな。」

二人は入る気 満々の様だ。

レンは もう既に玄関の取っ手に手をかけ  
玄関扉を開けた……………時だった

ルナ「ひうつ……………！！！」ビクッ

ルナが私の後ろで思いつきり  
身を縮こませた。

本格的に震えている…ここまで怯えているのを見るのは  
今回が初めてだ

レン「一番乗りレン、行っきまーす」  
ユウ「ルナ、外で待ってても良いぞ。」  
フィル「そうだね。怖いなら、外で待っ」  
ルナ「私も行く！！」

震えつつ、ルナも私の影から  
飛び出てきた

何か…………ルナが怯えるような  
恐ろしい事が 起きなきゃ良いけど…

魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）〔中盤〕

ライラ「全く……フィルにも困ったものだ……」

私の名はライラ・リー・ジークバーン基本的に  
皆、私の事をライラと呼ぶ

一見普通の人間の様に見えるが、私は人間では無い  
デュラハンと呼ばれる首の取れる魔物である

（略）

確かに常に首を腕に抱えていれば、落ちる心配も無くラクなのだが……  
どうも抱えていると、視線が低くなり遠くを見渡すことが出来なくなる上

大剣を構える事が出来なくなる為だ。

セリシア「よう！ どうしたライラ 浮かない顔をして」

ライラ「おお、セリシアか……」

奴はセリシア

確か……種族は……オーガだったな

戦闘教官で、過去に何度か手合わせをしたことがあるが  
素手なのに強い。何度 負けたことか……

セリシア「またフィルかな……？」

ライラ「そうだ……… どうして奴はこう 訓練をサボるのだろう……？」

セリシア「まだ、14歳だもんな。」

ケラケラとセリシアは笑う

決して笑い事では無いのだが……

ライラ「私が12歳の時は既に戦場を走り回っていたぞ?」

セリシア「ライラと比べちゃ話になんねえよ。ライラは産まれた時から」

騎士の娘だろう…に比べ　フィルは道具屋の娘だ…」

ライラ「まあ…な……。」

何処かセリシアの言葉には納得できるような

言葉が含まれており、言い返すことが出来なくなることが多い

セリシア「まあ大目に見てやれよ。俺等みたいに攻撃最前線部隊じゃねえんだからよ。」

ライラ「確かに私達は最終防衛線部隊だがら戦うのは最後だが…」

セリシア「大丈夫だって。こっちにはカーリーナとケルベロスが居る怖いものなんてねえよ」

ライラ「ああ、あの地獄の姉妹か……」

セリシア「だからよ。肩の力抜いて待ってるよ。」

ライラ「ああ…分かった。」

セリシア「じゃあな。」パチッ

セリシアは、パチンとウインク…まがいの両目瞑りをする  
自分の遼に戻っていった…

レン「フォールド城、陥落!! 私達の勝利!!」

どうやら、セリシア達はフォールド城の制圧に成功したようだった  
陥落したフォールド城の周りの空に地獄の姉妹が居るのが確認できた。

フィル「むー…」

変な唸り声が聞こえたので

振り返ると、そこには武装したフィルが

どこか不満そうに黒い煙を上げたフォールド城を見ていた

ライラ「…？ フィル、何処か不満そうだな？ 暴れ足りなかったか？」

フィル「い、いえ……べ、別に……」

ライラ「そうか？ 折角、私がお前と戦闘相手になってやろうというのに……」

フィル「け、結構です！ …じゃ！」

まさに尻尾を巻いて逃げていった

昨日、キツく鞭で叩きすぎてしまったようだ  
少し反省する…

ライラ「明日から、休暇だが……ん？ あいつ等何やってんだ？」

そこには、セリシアとカーリーナとケルベロスが  
フィル達の居る寮の前で

扉に耳を当て何かを聞いているようだった

ライラ「セリシア…何やっているんだ？」

セリシア「ライラ…！ 良いところに……馬鹿四人組が、また何か企んでるぞ」

ライラ「またか……」

どうやら、フィル達が また何か企んでいるようだ…

この前はカリーナとケルベロスのアルコールのビンに『百合発情薬  
“狂”』を

10本分、混ぜた挙句 臆病な奴と真面目クンを置いて逃げたから  
な…

まあ、名指しで 誰とは言わんよ……『誰とは』な

フィル「じゃ…明…南の館に侵……た……暴れるぞ!!」

レン「楽しみだな」

ユウ「部…ちょ…は？」

レン「伝えなくて良いと思うよ？ 伝えたら面倒くさそうだし…」  
ルナ「……………こ……………い……………」

レン「ごめん、ごめん!!」

能天気アホウドリ以外の声は、よく聞こえないが

何か悪いことを企んでいるのは確からしい……

明日、尾行する他なさそうだ…

何かが起こる前に事前に対処しないと

取り返しの着かないことが 起こりかねない。

レン「うわぁ」 本当に こんな場所あつたんだね」

ユウ「てつきり、単なるフィルの聞き間違えと思っただが…本当にあ  
るとは……」

レン「この古い感じが、如何にも『怪物居ます危険!!』 見たいな  
感じだね」

今、私達はフィル達を追って

南の方に あった館の前の柵に隠れている

正直、こんな場所に こんな館があるとは思ってもよらなかった。

レン「じゃあ、一番乗りい」  
ユウ「先に行き過ぎるなよ。」  
ルナ「ま、待つてよ…」ボタン

ルナを最後に玄関の扉は重々しく閉まった  
私達はその閉まるのを見届けると  
駆け足で館の玄関入口まで接近した

セリシア「カリーナ……此処、地図にあったか？」

カリーナ「いえ…地図ではありませんが……このような館は  
ありませんでしたわ…」

ケルベロス「未開の地って事か……おもしれえ…入ろうぜ!…」  
ライラ「この大きさからして、調べ上げるのに丸一週間は……ケル  
ベロス!？」

ケルベロス「驚き過ぎだっつーの」  
セリシア「こら待て!…」

それだけ言い残すとケルベロス勝手に一人で  
未開の地にある館内に入っていた  
さらに、セリシアまでもケルベロスを追うように  
館内に消えていった  
私もセリシアを追おうとした時だった。

カリーナ「ライラさん待つてください。」  
ライラ「え？ あ、何？」

カリーナに呼び止められた

カリーナ「私、翼と体が大きすぎて入らないのですが……」

言われてみれば…

扉が約1m90cmだとして……カリーナの体長は5mチョット  
確かに入らない…

ライラ「じゃあ、擬人化したら？」

カリーナ「擬人化というと……？」

ライラ「人間に変身したらどうだ？つて事」

カリーナ「なるほど…」

ライラ「じゃあ、早く」

カリーナ「人間の女性は、どんな姿ですか？」

ライラ「は？」

カリーナ「ええっと…私、見たことのある人間は男性ばかりで……」

カリーナつて…戦場だとあんなに頼りになる存在だが

どうもこういう事柄になると……頼りない存在になる…

カリーナ「おかしくありません？」

ライラ「尻尾と翼以外を抜けば、普通の人間のお嬢様だ。」

カリーナ「そ、そうでしょうか…？」

ライラ「入るぞ。」

カリーナ「待ってくださいまし!!」

だいぶ遅れてしまったが、私達も無事に館内に侵入した

~~~~~  
~~~~~

虎影達の館侵入から16日と15時間前

P M・17:00

琥珀「あーもう!!　ねえ聞いてよ!!　竹虎あ……」

また、琥珀が泣いている

取りあえず鼻水拭け　汚いから。

竹虎「どうした?」

琥珀「最近、虎影が冷たいんだよねえ……誘惑しても素っ気ないし……」

竹虎「……………」

なんだ…姐さんの事か……

てつきり、男に囲まれて裏路地に連れていかれ　【自己規制】　されて

【自己規制】　したのかと思ったのだが…

琥珀「この前だって『花之欲』をアルコールに一本分混ぜたのに…見向きもしない……」

竹虎「……………」

…アレを一本分混ぜたのか……

通りで、この前　猛虎と騎虎と虎丸と虎盗が襲われて失神した筈だ……

琥珀「竹虎…?　聞いてる?」

竹虎「ああ、聞いている。」

琥珀「やつぱり、おっぱいの大きな女性の方が好きなのかな…？」

私も猛虎見たいに大きくなりたいなあ…揉むだけじゃダメなのかなあ??」

竹虎「……………」

琥珀は見事なまな板胸をまさぐりながら、自分の大きさを探っていた

狼夜「琥珀？ 何やっているん？」

琥珀「狼夜!!」

軌狼「やあ、竹虎。 1時間ぶり」

軌狼と狼夜が前から歩いてきた。

どうやら、二人とも習い事から帰る途中だったようで私服に肩掛けバックの格好であった

竹虎「やあ…………軌狼… 1時間ぶり…」

軌狼「ほら、竹虎 笑わないと幸せが逃げちゃうぞ?」

軌狼が ぐいーっと頬つぺたを抓り上げる

正直、痛い。本当に軌狼前だと嫌でも笑わないといけないから仕方がない。

軌狼「これで良し。 竹虎は笑った方が美人になるんだから、笑いなよ」

竹虎「はい…」

軌狼「折角だから、これから飲みに行かない?」

軌狼が何処か楽しそうな素振りで

近くのレストランに指を指した

私は琥珀と一緒に丁寧に断わり帰ろうとしたが、次の言葉で琥珀が見事に釣られた

軌狼「勿論お代は、私が持つからさ、ねえ行こう？」

琥珀「よし、行こう！！」

軌狼「よし決定、じゃあ、行くよん」

軌狼「で、竹虎達は何 習ってるの？」

竹虎「先に軌狼達は？」

軌狼「私等は理数系かな…で？」

竹虎「……………」

軌狼「あー！！ 無視するなー！！」

正直 軌狼は、やかましい…

普通に友達としては楽しいが……

親友までは行かない。

琥珀「でさー…おっぱいの話に戻るけどさー」

竹虎「ぶっ……………！！」

お茶を盛大に吐き出す

いや、戻らなくていいから！！

もう胸の話は良いから！！！！

琥珀「竹虎っておっぱい大きいよねー。猛虎より小さいけど、羨ましいなー」

竹虎「有っても、邪魔なだけだぞ？ 刀とか振りにくいし…」

何としても、脱線させねば。  
痴女グループと思われる前に早く！！

琥珀「狼夜、何を食べたら そんなに大きくなるの？」

狼夜「何をつて…普通の食事していた だけだけど？」チラッ

いや、こつちを見られても困るから

それで、まな板大魔王を脱線させられないから！！

軌狼「琥珀…おっぱいは普通に御飯を食べてれば大きくなるさ。」

琥珀「本当？」

軌狼「ああ…せめてAA→A+位にはなるさ。これにてこの話はオシマイ」ウイंक

竹虎「……………」。「二ッ！！」

男1「ねえちゃん達、この後暇？」

男2「俺等達と遊ばない？」

男5「メアド交換しない？」

男3「悪いようには、しないからさ」

食事を初めて30分頃だろうか…？

如何にも頭が悪そうな男6名が声をかけてきた

正直、姐さんの気持ちも分かった。

群がってキシヨい。1人で来いつての…

黙って席を立てて帰ろうとした時だった

奴が、やってくれた。

琥珀「ちょっと行きたいことがあるから、そこに付いてきてくれるなら

メアド交換、遊んでも良いよ？」

男6「マジかよ!？」

余計なことを……………

結局、俺等は琥珀に引つ張られるまま  
有名な南の館前に着いた。

男1「お、おい…此処って……」

琥珀「うん。じゃあ、行こうか」

何を言い出すんだ!?

この“まな板ペツタン大魔王”は!?

生憎、仕込み刀を装備しているとはいえ……

霊体には効果がないぞ!?!?

琥珀「どうしたの? ここに入ってくれば、メアドの交換、遊び

【自己規制】、何でもしてあげるのに……………」

男4「うおおお! マジで!?!? じゃあ俺一番乗り!?!」

琥珀「アブノーマル 【自己規制】 も可だよ?」

男2「二番乗り!?!」

結局、男全員と片手にビデオカメラの琥珀は館の中に入ってしまった。

ああ……………男って本当に馬鹿だな……

あと、琥珀も相当な大馬鹿野郎だ……………。

なんで此処に入らなければならんだ……

本当に世話の掛かる奴。

こうして私等は重々しい足取りで館内に入ってしまった。



魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）〔中盤〕（後書き）

此処でちょこつと説明

ライラノデュラハン

フィル達の部隊長

元々騎士生まれで、頑固

常に頭を首に乗っけているため、初見の人は人間と間違える。

セリシア／オーガ

皆が頼りにしている戦闘教官

戦場生まれで、フォールド城・制圧戦の中で誰よりも  
経験が豊富 妹も居るが、過去に戦死している

カリーナ／ドラゴン

地獄姉妹の姉の方 対空戦が主

普段は黄金色のドラゴン

お嬢様口調気味

ケルベロス／サラマンダー

地獄姉妹の妹の方 対地戦が主

人間とサラマンダーの子

何故、ケルベロスと言う名になったのかは不明

~~~~~

琥珀（コハク）

虎影の側近。また“彼女”でもある

虎影一家の中で一番の ペッタンまな板胸

彼女の裏の あだ名は、まな板

竹虎（タケトラ）

常に猛虎と一緒に居る

猛虎が暴走したときに止められる唯一の存在
何処に行くのも、仕込み刀を持っている

狼夜（ロウヤ）

琥珀とほぼ似ている存在

違うのは、白狼の側近で有ることと

胸はB＋カップある事

軌狼（キロウ）

竹虎と同じく天狼の抑え役

竹虎とは、“暴走者を止める仲”として仲良くしたいと思っているが
竹虎は迷惑に思っていることに気づかない

魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）（後半）（前書き）

途中、私 疾風が力尽きましたので

式式に書いてもらっているところがあります

そして、コチラが館に侵入した順番表です

フォレス班↓友哉班↓古式班↓リヨウ班↓
↓零式班↓白零班↓俊一班↓クラッド班↓
↓大和班↓竹虎班↓フィル班↓ライラ班↓虎影班

魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）（後半）

牙狼「げっ！！ 硫酸雨が本当に降ってきやがった。」
零式「うわ。本当だ、皆あの館まで全力で走れー！！」

俺の名は零式

この狂った世界に住む旅するガンナーだ
それにしても…本当に硫酸雨が降るとは……
ここも終わっているな…

見る見る緑色の大地が溶けて茶色の荒地に変わっていく
これは町に居た バザーの人達は死滅したな…

クログネ「土砂降りだな…どうする？」

暴虎「中に入ろうぜ それ以外に方法は、ねえだろ？」

確かに…このミスリル合金で出来たの館なら、
硫酸雨を凌ぐ事が出来そうだ

零式「そうだな…このまま居ても俺等が死ぬだけだ……入ろう。全
員武器展開」

そうだ…例え館に主人が居て、
断られるようなら……殺してしまえば良い…
この狂った世界では、強い者が偉いのだから…

~~~~~

母親「アンタ！ 今日暇でしょ？ 妹達を連れて遊びに行つてよ。」

俊一「……はい。」

……母さんに逆らつたら殺される

そう思つた僕は出かける準備を始めた。

僕の名は俊一

何処にでもいる中学2年生だ

今日、母さんは知らない男の人と遊ぶみたいだ

邪魔になるので、この前 見つけた館で暇つぶしをしようと思つて  
いる

霧衛「お兄ちゃん、今日は どこ行くの？」

俊一「えーつとね…家から南東の館に行こうかなと思つてる。」

翡翠「武器 持つて 琴乃行くよ!!」

琴乃「ふえええ…おねえちゃんまつてよ〜。」

此処で、家の家族の紹介をしておこうと思う

まずはお父さん…お父さんは僕が小学2年生の時に多額の借金を残  
して自殺した。

つぎにお母さん…お父さんが死んでから僕達に対するDVが酷くな  
つたような気がする

次ぎに長女霧衛…家の家族の長女中学1年生、過去に春売していた。  
次ぎに次女翡翠…お母さんを倒せる ただ一人の人物。 琴乃を傷つ  
けたときは殺しかけた

最後に三女琴乃…まだ小学1年生。琴乃が溺愛している。

翡翠「良い？ 琴乃、怖い奴が居たらお姉ちゃんが叩き潰してあげるからね。」

琴乃「うん。おねえちゃん」

霧衛「ご飯よし。飲み物よし。お菓子よし。着替えよし。武器よし。懐中電灯よし。」

俊「母さん…？」

母親「なんだい。母さんは忙しいんだ！ 早くして このグズ…！」

寝ながらテレビしか見てないくせに……

お前がグズだよ……

俊「う、うん……帰って来て欲しい時間は？」

母親「はあ？ 一生、帰ってこなくても良いよ食費も減るし」

俊「……………」

母親「分かったら行けよ！ それとも殴りたい？」

お母さんが血塗られた釘バットを持ち出した…本気で殺される……

翡翠「あ、あった。学校で作った私の秘武器“親殺し”行こ 兄貴」

俊「う、うん」

翡翠が何処からともなく現れ

釘バットを攫っていった…

ん？ 親殺し？ 凄い物作ったな…

殺る気 満々じゃん…何としてでも、高校までは育てなければ…。

霧衛「お兄ちゃん！ 泊り込み準備完璧だよ！」

俊「ああ、うん。」

翡翠「残りは兄貴だけだよ。」

琴乃「おにいちゃん、いこう」

こうして僕等は、手を繋ぎながら南東の館に入って行った

~~~~~

白零「黒零！！何か見えたか？！」

黒零「否、何も…シロは？！」

シロガネ「ここから約北に俺等を殺しに来た軍隊が30見える。」

白零「30人か？」

シロガネ「30万人だ。」

斬鬼「…迎え撃つか？」ケセセセッ

黒零「いや、これ以上 人を殺めてもLevel upはしないだろっ…」

白零「なら、どうする?。」

シロガネ「…!」カツ!!

斬鬼「どうした? 新しい敵でも見つけたか?」ケセセセセツ

シロガネ「ここから、南西……大きな空家が見える。」

白零「空家?。」

シロガネ「ああ、空家だ…大きさは……」

黒零「大きさは?」ゴクリッ……

シロガネ「この前、壊滅させた街の8倍だな。」

斬鬼「人間は?」ケセセセセツ

シロガネ「……見えない。……生体反応は…ある。」

白零「ふうん…と言うことは何かは居るってことかい?。」

シロガネ「ああ。」

斬鬼「面白そうか?」ケセセセセツ

シロガネ「今までに無かった程に面白いかもしれないな…」フッフ…

白零「そうか……そこは死ねそうか?。」

シロガネ「ああ、何回も死ねるな…絶望するくらいに。…行くか？」

白零「勿論」…全員手を出せ。」

黒零「瞬間移動か？」

白零「それ以外に何がある？ ……行くぞ」……シュンッ！！

白零「此処が館か…」クツクツクツ…

黒零「派手に暴れよう…！！」ウズウズ

斬鬼「皆殺しの宴が始まるぜ！！」ゲヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！

シロガネ「参る…」シャキン…

ギィィィ……ボタン…！

魔鬼（各グループが館に到着するまでの話）（後半）（後書き）

此処で 少し説明

零式／人間…ガンナー

“この狂った世界”の人工ウィルス大災害で
生き残った元は普通の学生

狂ったウィルスを生み出した学者を殺すため旅している

クロガネ／人間…侍

“この狂った世界”の火山噴火大災害で
生き残った最後の侍

腕はかなり立つ方

暴虎／人間…暴力団

“この狂った世界”の大気汚染大災害で
生き残った何処かの暴力団頭

一殴りで相手の顔面を砕く

Q・あれ…？ 何処かで似たような名前が…？

A・はい。猛のつく人の兄（？）です

牙狼／人間…盗賊

“この狂った世界”の大地沈降海面上昇大災害で
生き残った盗賊集団の幹部

この中で、誰よりも暗殺術を習得している

Q・あれ…？ 何処かで（以下略）

A・はい。白のつく人の過去のリーダーです

俊一／人間…中学二年生

遠山家族のただ一人の男長男

幼い頃に父を亡くす

非常に頼りない駄目兄貴

霧衛／人間…中学一年生

遠山家族の長女

過去にお金に困って春売に手を染めた

さらに死を一回 経験したことある。

翡翠／人間…小学三年生

遠山家族の次女

父親と母親の暴力的な所を強く受け継いだ

妹 琴乃は絶対を守ると決めている

琴乃／人間…小学一年生

遠山家族の末っ子

まだ漢字がかけない

白零／強化人間…刀使い

Dr.？に造られたある人をベースにクローン強化人間

人間を惨殺するために生産された

黒零とは双子の姉

黒零／強化人間…二挺拳銃使い

Dr.？に造られたクローン強化人間

人間を惨殺するため生産された

白零とは双子の弟

シロガネ／改造人間…侍

D r . ? に捕らえられた元人間

白零と黒零と斬鬼をサポートするために造られた
住んでいる世界は違うがクロガネの弟

斬鬼 / 強化人間 : 殺人鬼

D r . ? に造られたオリジナル人間

残酷さは3人の中で一番

妹に憧れており年下の女の子には優しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819z/>

魔鬼 改

2011年12月30日14時47分発行